

■ 掛川への交通ご案内

新幹線での所要時間

大阪	約2時間20分	約1時間45分	東京
名古屋	約1時間	約15分	静岡
浜松	約13分		



東名高速道路での所要時間（約80km走行での時間）

大阪	名神・東名高速道路 約4時間	掛川I.C.	東名高速道路 約2時間40分	東京
名古屋	東名高速 約1時間30分		東名高速 約50分	富士I.C.
浜松I.C.	東名高速 約16分		東名高速 約35分	静岡I.C.



大手門駐車場・大型車6台・普通車201台

■ 掛川城へのご案内 <掛川駅から徒歩7分>

至上西鄉·倉真



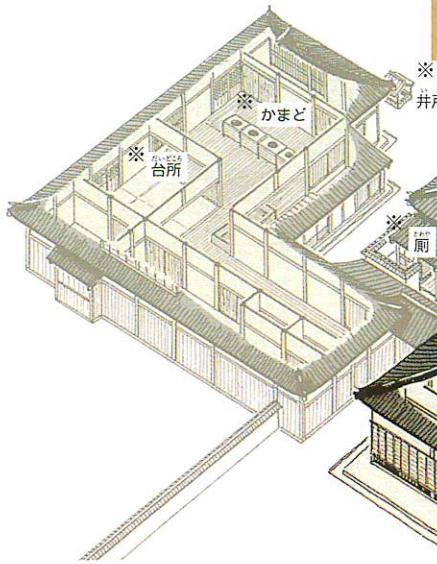
■ 入館のご案内

■ 開館時間 午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

年中無休



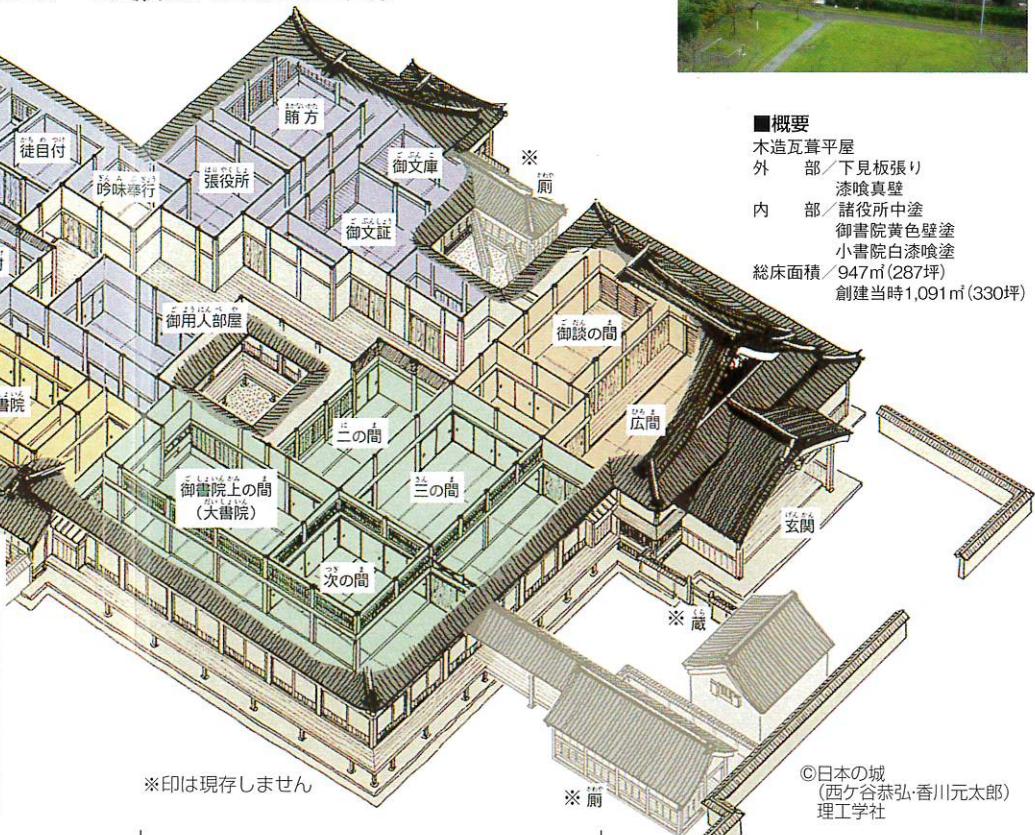
掛川城御殿



掛川城二の丸御殿内部(創建当時)



御書院上の間 床の間と脇 ■ 御書院は城主の対面所で、上の間はその主室にある。柱を入れ畳を敷いた床の間と、脇には隠れ棚が設けられている。右手には付書院を略した障子窓がある。



■概要

木造瓦葺平屋
外 部／下見板張り
漆喰真壁
内 部／諸役所中塗
御書院黄色壁塗
小書院白漆喰塗
総床面積／947m² (287坪)
創建当時 1,091m² (330坪)

©日本の城
(西ヶ谷恭弘・香川元太郎)
理工学社

掛川城御殿の歴史

現存する数少ない城郭御殿

御殿は、儀式・公式対面などの藩の公的

資功によって安政2(1855)年から文久元(1861)年にかけて再建されたのが現在の御殿で、明治元(1868)年までの間、掛川藩で使われました。

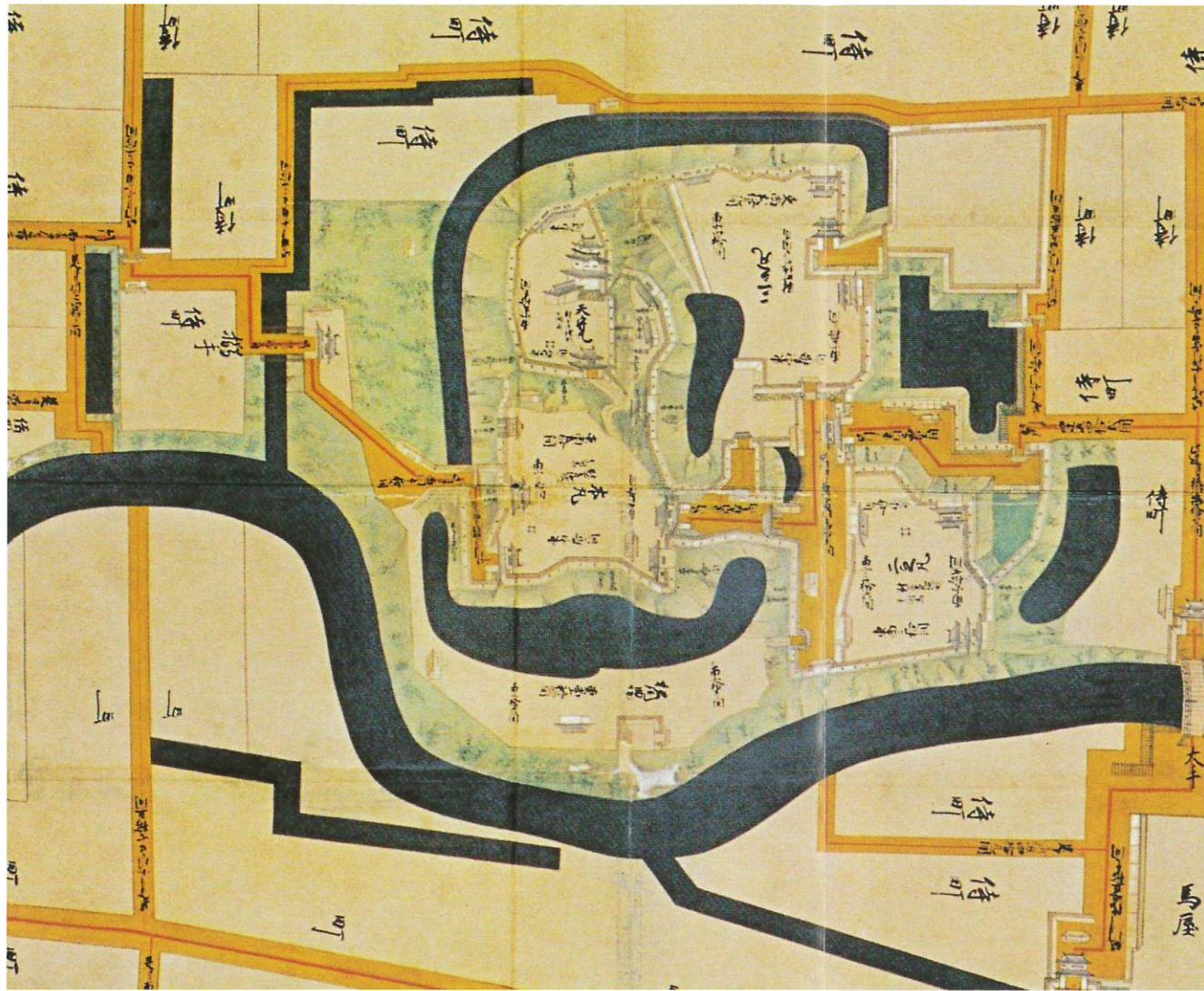
掛川城御殿の構造

掛川城御殿は、7棟よりなる書院造で、部屋はそれぞれの用途に応じ約20部屋に分かれています。

最も重要な対面儀式が行われる書院棟は、主室の御書院上の間と、謁見者の控え



正保城絵図と掛川城



掛川城歴代城主

「寛政重修諸家譜」により作成

●城主名

●桝高 ●入城年 ●西暦 ●在城年数 ●摘要

●城主名

●桝高 ●入城年 ●西暦 ●在城年数 ●摘要

掛川城の整備において、発掘調査などとともに重要な資料とされたのが正保城絵図です。

正保元(1644)年、徳川幕府は全国の城郭の状況を把握するため、諸大名に城絵図の提出を命じました。これが正保城絵図と呼ばれるもので、63城の絵図が残されています。

正保城絵図に描かれた掛川城は、中央の天守丸と本丸の周囲を三日月堀・十露盤堀・松尾池などの堀が囲み、堀の外側に二之丸・三之丸などの郭が配置されています。これらの郭を堀が囲み、堀の外側に家臣の屋敷が配置され、またその外側を堀が囲んでいて、中心部が厳重に守られている様子がわかります。

正保城絵図に描かれた登城路や三日月堀、十露盤堀などが発掘調査で明らかになり、整備に活かされました。

城の南側に外堀の役目を担う逆川が流れ、逆川の南側には総堀に囲まれた城下町が広がっています。城下町の中央を江戸と京都を結ぶ東海道が東西に通っています。

諸大名が城主を務め、堅固な造りで東海道に面する掛川城は、將軍の上洛などの時の宿泊所としての役割も果たしました。

徳川家康は、慶長19(1614)年の大坂冬の陣に際し、駿府を出発して掛川城に泊まっています。第2代將軍秀忠は、元和3(1617)年の上洛の時など掛川城に泊まっています。第3代將軍家光は、寛永11(1634)年の上洛の時に掛川城に泊まっています。第14代將軍家茂は、慶応元(1865)年の第二次長州征討に向かう途中に掛川城で宿泊しています。

掛川城の歴史

戦国武将たちの覇権争いの中で

掛川城より東に500mほどのところにあった掛川古城は、戦国時代の明応6(1497)年から文亀元(1501)年の間に、駿河の守護大名今川氏が遠江支配の拠点として重臣朝比奈泰熙に築かせたといわれています。

その後、遠江における今川氏の勢力拡大に伴い、掛川古城では手狭となり、永正9(1512)年から10(1513)年頃に現在の地に掛川城が築かれました。

永禄3(1560)年桶狭間の戦で今川義元が織田信長に討たれると、永禄11(1568)年義元の子氏真は甲斐の武田氏に駿河を追われ、掛川城に立て籠もりました。翌年、徳川家康は、掛川城を攻め長期にわたる攻防の末、和睦により開城させました。家康領有後、重臣石川家成が入城し、武田氏侵攻に対する防御の拠点となりました。

天正18(1590)年全国平定を達成した豊臣秀吉は、徳川家康を関東へ移すと、家康の旧領地に秀吉配下の大名を配置し、掛川城には山内一豊が入りました。一豊は城の拡張や城下の整備を行うとともに、掛川城に初めて天守閣をつくりました。



石落し■ 天守台の張り出し部に設けられ、石垣を落としたり、櫓を突き出したりして、石垣を登ってくる敵を攻撃する施設。



霧噴き井戸■ 永禄11(1568)年から12(1569)年徳川家康は、今川氏真が立て籠もる掛川城を攻めました。この時、井戸から立ち込めた霧が城を包み、家康軍の攻撃から城を守ったという伝説があります。

「東海の名城」を揺るがした大地震

江戸時代の掛川城は、東西約1,400m、南北約600mに及び、徳川家康の異父弟の松平定勝や子、江戸城を築いた太田道灌の子孫太田氏など諸代大名の居城として栄えました。

貴族的な外観をもつ天守閣の美しさは「東海の名城」と謳われました。しかし、嘉永7(安政元、1854)年安政の東海大地震により天守閣など大半が損壊し、御殿、太鼓櫓、廊の門などの一部を除き、再建されることなく明治維新を迎、明治2(1869)年廢城となりました。

その後、御殿は様々に使用されながら残りましたが、天守台や本丸の跡など一帯は公園とされてきました。掛川市民の熱意と努力が実を結び、天守閣は平成6年に140年ぶりに木造で再建され、ふたたび美しい姿を現しました。

掛川城天守閣



見性院肖像画



山内一豊肖像画「(財)土佐山内家宝物資料館所蔵」

掛川城天守閣の特徴

掛川城天守閣は、外観3層、内部4階からなります。6間×5間(約12m×10m)の天守閣本体は、決して大きなものではありませんが、東西に張り出し部を設けたり、入口に付櫓を設けたりして外観を大きく複雑に見せています。1階、2階に比べ4階の望楼部が極端に小さいのは、殿舎の上に物見のための望楼を載せた出現期の天守閣のなごりといえます。白漆喰塗り籠めの真白な外容は、京都聚楽第の建物に、黒塗りの廻縁・高欄は大坂城天守閣にならったと考えられます。



狭間■ 城郭内の建物や堀に設けられた穴で、内側から鉄砲や弓矢で攻撃するための施設。



軒唐破風と火燈窓■ 破風とは、軒の三角形部分をさし、掛川城天守閣に用いられているものとされる壁面に取り付けた、床脚風と呼ぶ

■概要

天 守／瓦葺、3層、内部4階(地上2階、塔屋2階)
外部白漆喰塗籠、4階出入口引分け戸と廻縁・高欄は黒塗。
内部壁嵌板、4階は貼付壁、格天井
棟高垣上端より53.4尺(16.18m)

付 横／瓦葺 1層1階 外部白漆喰塗籠 内部漆